『雑草と野草―― 一本か二本のバラと共に』

（*Weeds and Wildings Chiefly: With a Rose or Two*）

藤江　啓子 訳

ハーマン・メルヴィルによる

「若さは人間の適切で、永遠で、真の状態だ」 ナサニエル・ホーソーン

雑草と野草（Weeds and Wildings）

ウィンフレッドへ（To Winnefred）

あなたと私にとって、ウィニー、赤いクローバー（ムラサキツメクサ）はいつも野原の最も愛しい花の一つだ。ところで公言するが、この赤い弟の慎ましい異母姉である白いクローバー（シロツメクサ）にとってそのことは不快ではないとあなたも思うだろう。両方の種類のクローバーに対する私たちの感情は、本質的に自己中心主義の空想的連想から生じるものではない。それは、例えば、「贅沢に暮らす」（Living in clover）という言葉の快いあやの適切性を、経験により稀なやり方で私たちが証明したからではない――私たちが赤いクローバーを好むのはこのためではない。それにもかかわらず、私たちは毎年なんエーカーもの赤いクローバーに囲まれてかつて住んだ。私たちは、一緒にあるいは別々に、見つけた者には幸せの兆しがあるとされる稀な四つ葉のクローバーをしばしば見つけたというわけでもない。もっとも、私としては、44年前の結婚の月の４日の午前早く、道端で四つ葉のクローバーを偶然見つけたことを年に１度あなたに思い出させよう。

だが、言ってくれ、私たちはこの花が好きにはならないか――もっとも、花屋は花の部類には入れないが、それは花だ――それ自体が新鮮で美しいだけでなく、苗木屋の繊細な養い子ではなく、全ての人が知っており、近づくことができる丈夫な小さな生き物で、だれもその魅力を独占できないからだ。そう、私たちはここでは共産主義者だ。

まだらの雌牛の口のなかで甘い。その雌牛の息をあなたは吸うことを好み、疑いもなく鼻孔と目には心地よい。私たちの同様の感覚にも甘い。最も実利的な人間である農夫によって賞賛されている。農夫にとって、草原の野生のアマランスは、不滅の象徴ではあるが、雑草であり忌み嫌われ、ミツバチのような気難しいおせっかいに気に入られている。いかなる生き物の不興も招かず、全ての生き物の善意を、奮闘なしに享受するとは、私たちのお気に入りのぴったりの運命ではないか？この小さな花の田舎者が羨ましいほどの免除や特権を享受するのはなぜだ？　いかに才能に恵まれ善良であろうと私たち人間とは同等に共有できない特権。それが理由で深く眠れないのだ。だが――平和に、いつも眠る人を休息させる。

私たちの選んだ丘の中腹の家は農家で――今や私たちのものではなく、私たちの所有権を引き継いだ都会の野蛮人によってずっと以前に取り去られ、腰折れ屋根と屋根窓を取り去られ、私が最後に見たときには、怠惰に落ち着いて幾度も自然の腐朽に静かに満足していた。ウィニーよ、以前には明るい夏の早朝の散歩で、手に一杯に安っぽく小さな元気のよい柔和なバラを野原から採ってきて、カエデの木のマントルに捧げるために幾度も持って帰った。そのマントルはあなたの祭壇だと誰かが呼んだが、あなたの好きな南向きの馴染みの部屋にある。そして10月には 近くの肥えた小さな窪地にある湿った草木の茂みに覆われた二番草から集めてきて楽しんだ。そこは間もなく雪が積もり、それから数ヶ月は見えなくなった。そしてあなたは憶えているだろうが、かつて先立つ冬の陽気な散兵である明るく輝くにわか雪のなかでバラを刈り取った。あなたの部屋の穏やかな暖かさが雪の薄片を露と溶かし、赤いバラからころがり落ちる。「幸せの涙」とあなたは言う。

三つ葉のマドンナ、あなた以外の誰にこの「雑草と野草」を捧げよう。それは、全く別の、そして後の自然な二番作の倹約を知らぬ子供たちで、提供者に近づく終極の季節を示唆することはあまりにも明らかだ。だが受け取ってくれ。そして誰かが示したい「溶ける気分」を示唆するために、古の赤い捧げ物の上の溶けた雪片を思い出してくれ。そしてあなたの「幸せの涙」を思い出してくれ。

第１部――その年（The Year）

ぐずぐずする者（The Loiterer）

1

彼女はぐずぐずするが、やって来ると信じている、
彼女の約束は日を指定しない、
なぜ毎晩残り火のそばで

火が消えゆくのを悲しみながら物思いにふけるのか ——
そう、彼女に遅れさせよう！
ここにいる私たちに待ち焦がれながら彼女はどこにでもいる、
彼女は人気者、放蕩し、若い、
そして私たちは、長く居座り、老年だ、
もっとも彼女は私たちを元気づけることが出来るが、私たちは彼女を勇気づけることが出来るだろうか？
悪いことは考えないようにしよう。

２

それでは見守り待て、
牧場の柵のそばで待て、
あるいは庭の門のそばで見守れ、
なぜならば、もっとも彼女は遠くさまようけれど、来た後には
まず彼女は細い道に現れる ——
細い羊の道が茶色の丘の斜面を通る、
あるいは小道が向こうの庭に通じる。

３

暖炉でうたた寝する真昼の光のなかで
大地の抱擁や丸太の灰の赤い燃え残りで溶けるのを嫌い、
モミの下に雪が残っているあいだ、
そして太陽の光で温められた窓のそばの鳥かごでは
鳥が歌を歌うように励まされている、
そのとき以前には毎年そうであったように、
同じ小道にそって、
彼女は骸骨のような木を通して太陽の光が当たる
風雨に打たれたドアに近づいた。
彼女は何も言わなかったが、次のように言っているようだった ——
「ご老人たち、私に会えて嬉しくはないですか！」
そうすると涙が私たちの目に溢れた —— その日に祝福あれ！

そして彼女は振り返った。どこに彼女はいなかったか？
彼女はここにいた —— 彼女はそこにいた、

熱心に ── 至るところ、
決して忘れられない場面を再び訪れる者のように。

羊飼いが羊の群れの先頭に立つ時（When Forth the Shepherd Leads the Flock）

羊飼いが羊の群れの先頭に立つとき
白い子羊と薄汚れた雌羊
そして庭ではディブルで穴を掘り苗を埋め込む時、
その時世界は新しく始まる。

キンポウゲがあたりの牧場を
輝かす時、黄金時代が
町には戻らぬとしても、
牧草地に戻る。

さわやかな風がそよぎ
牧草地への雨を予報する時、
そしてタンポポが踊りはねる時、
その時恋を知らぬものが一緒に踊る ──
野生植物は雑草と共に！

だが、ああ！　野生の特徴を
持つものは悲しいかな！
牧羊神パーンが埋葬されて以来
無益な生き物には災いが襲いかかる ──
人間には無益な生き物の上に！
キンポウゲとタンポポ
野生植物、そしてその他のもの、
庶民と休暇中の人
それらをまとめて一つの試金石に書き留めよ。

農夫たちが探し出し、
そうだ、そして駆逐させるだろう、
干し草にはないのがよい ──
牧草のなかのスズメノエンドウ！

花屋は鼻先であしらい、
子供以外はほとんど誰も欲しがらない、
それらを愛せ、救え、
取り戻し、織り交ぜよ、
決してため息をついてはいない —— ああ！と

小さな仲間たち（The Little Good-Fellows）

道をあけてくれ、道をあけてくれ、あなた方の果樹園の上も下も
動き回る許可を与えてくれ、
もしあなた方が愛しているなら毎年歓迎だ！
そして私たちを愛した者は皆いつも繁栄した。

愛には愛。友のいない人が
森のひさしの下、死んでいるのを見るとき、
私たちは蕾と葉で覆う、
そしてチップマンク、ハツカネズミやモグラに ——
この哀れな人間の魂を悩ますことがないように言う！

そしてあなた方の道が巡る
緑の地面にて、
あなた方が誰か確信できないので、用心し遠くはなれて、
疑念のうちに中途半端になることがないようにしよう、
そうではなくて、草のように湿地の石にやってこよう
人間がいるところはどこでも恐れることなく。

だがあなた方の帽子を投げよ、
農家の畜舎に長い間雪によって閉じこめられた、
乙女たちと男たちよ、
私たちは老いた冬を洞穴へ追い戻す。
私たちの赤いベストを見よ！　それでは元気をだせ ——
婚礼の贈物に気づいて、
春ごとにあなた方の果樹園を花ざかりにし、
そしてコックロビンが花婿の翼の上で曲線を描く時！

クローバー（Clover）

６月の日の朝が明け、喜びの風が吹く、
あなたの気持ちのよい野原は化粧をする
朝明けの赤い輝きよ、あなたゆえにより赤くなる、
ヨーロッパコマドリの胸はより赤くなる。

やんちゃ娘たち（Madcaps）

喜ぶ二人の子供たちを
私は果樹園で追う。
リンゴの木の窪地から
娘たちはハチを驚かせる。
クローバーは
赤いバラの垣根まで
香気を投げかける。
バラとクローバーの間に
イチゴが育つ。
リリーとチェリーに
蝶が付き添う
やんちゃ娘たちは陽気だ！

旧式（The Old Fashion）

ヴィアはなんと若々しいことか、
毎年変わらず永遠、
そして彼女のボボリンクは歌う
そして鳥たちは変わらず
若く陽気だ。

ヴィアは旧式、
もっとも永遠に新しいけれど、
そして彼女の若いボボリンクは
旧式を真実に保つ。
チー、チー！　鳥たちは歌う
大空は青い。

蝶小詩（Butterfly Ditty）

夏が海のようにやってくる、
波から波へ、なんと明るいことか、
夏の天国を私たちは急ぎ、
光を少しずつ飲もう。

庭園から庭園へ、
そのような特権を私たちは持っている、
私たちは徘徊し、飲み浮かれる。
そして私たちは怠け者になろう！
私たちは徘徊し、飲み浮かれる
ただ次のことを憂慮しながら ——
人間、エデンの悪い若者は、
至福を享受できない。

ルリツグミ（The Blue-Bird）

爽やかな空気のなかでハチに日向ぼっこをさせる
向こうのヒエンソウの青い鐘の下
もっとも最近そこに埋葬されたけれど
ルリツグミはもはや土のなかにはいない。

３月が頭上でかん高く笛を吹いた時、
硬くなってその鳥はモミの下に横たわった。
そして庭の蔽われた苗床のなかに
憐れみがルリツグミに墓を与えた。

そして穏やかに彼女（憐み）はため息をついた —— あまりにも早くその鳥は飛来した、
希望の翼に乗りその鳥は弔いの鐘に出会った、
彼の天上の色合いを土は和らげるだろう、
ああ、何か心もとない！

だが、ほら、きれいな天空の色が
６月にヒエンソウの持参金になる、

同じ大空の青――
その鳥は花に姿を変えた！

恋人とハシドイの茂み（The Lover and the Syringa Bush）
まるで灯りをともされたクリスマスツリーのように、
円材を取り付けられた岩屋のように、
緑の海の白珊瑚のように、
にぎやかな夜の星空のように、
私にはこれらのように、お前は見える、ハシドイよ、
それほど気高くする力を恋は持っていると信じる。
ここエデンの門のそばで私は彷徨する、
怠け者のイヴと会うために。

酪農夫の子供（The Dairyman's Child）
南風が吹く時
朝のように 穏やかに、
花が見える時
桃果樹園のように 芳しく、
バラや雪
あるいは澄んだオパールの
フレスコ画のように純粋。

平和のトロフィー（Trophies of Peace）
1840年のイリノイ（Illinois in 1840）
大草原のトウモロコシの列、
朝が穂先の大群（槍の軍勢）に戯れる！
カサカサと音を立てる羽毛（長旗）が上方に見え、
茶色いヒゲが下方では豊か。

シルクのスカーフをまとったアジアが
マラトンでギリシャ人に対して攻撃した時、
戦争の鎌にはそんなに無頓着に
太陽の光が槍や兜に降り注ぎ
羽毛や旗が踊ったか？

房の付いた死の踊り、
これらトウモロコシ —— 刈取り人は根元から刈り取る、
低く刈り取れ、そして豊作の女神ケレスのトロフィー、黄金の穀物を
平原に積み重ねよ。

そのような記念品、それだけ、
ああ、大草原よ！　果てしない収穫、
もっとも兵士は戦争の神マルスを軽蔑しばかにし、
年代記は野原（戦場）の名声を広めないが。

道端の雑草（A Way-Side Weed）

赤い果樹園のそばを彼は急ぐ、
素敵な屋敷からの御者、
彼は通りながら、
鞭を打ち振り神聖な道端の雑草を刈る。

しかし彼は自分のしていることを知っているのか？
道端の雑草、この揺れるアキノキリンソウを
笏とする10月の神を彼はばかにする？

シマリス（The Chipmunk）

秋の中心！
ふさわしい天気、
シャーベットのよう
冷たく甘い。

じっと動かないで私は立つ
ブナの木から
シマリスがこちらを覗いたり、伺ったりしているのを私は見る。
パチパチ、ガタガタ音を立て
大喜びで！
だが、ほんのちょっとの音に驚いて、
早急に逃げ去る ——
何処へ行くのか？

赤ん坊もそうだった。
陽気に騒ぎながら、
大地について
何か手掛かりに驚いて
私たちの暖炉から
逃げ去った！（そして 何処へ？）

野エゾギク（アスター）（Field Asters）
青い共有地の星（スター）のように
同じ名前を持つここのアスターは覗く、
野生のものは秋ごとに見られる ——
すべての人から見られるが、少数の人の目をひくだけだ。

なるほど見られはする。だが、誰がそれらの励ましを理解出来るのか、
あるいはそれらが何を意味するのか
野エゾギク（アスター）の視線が
私たち占星術師を不可思議に眺める時に。

いつも私たちと一緒！（Always with Us!）
時折賢い客は訪問するがすぐに帰る。
そう、いない間が慕われる、
彼は再び訪れるだろう、
そこで永遠に留まることはない。

そう、ロビンは賢いので、
昨晩南に向いて行った、
そこでは彼の友達が集まる。彼は帰ってくるだろう
新しい春のベストを着て、
そして不在ゆえに一層
大喜びで迎えられるだろう。

だが、お前、黒いカラスは
分別のない鳥で
決してお前は去らない ——

お前のカウルを何処か他で受け取れ？

枯れたツガの木の
白くなった枝から
季節が何であろうと、
冬であれ春であれ、
あるいは夏であれ秋であれ、
カラス、予言者、
私たちはお前が呼ぶのを聞く ——
カー！　カー！　カー！

農家の煙突の靴下（Stockings in the Farm-house Chimney）

今年のクリスマスイヴは
ウィリーとロブとネリーとメイは
幸せ —— 期待で幸せ！サンタクロースの橇
からの一杯に詰まった靴下を受け取る期待。

どこか人間のようで、人間以上の
超自然的存在を信じる喜び、
さっと見えなくなる、目に見えない妖精か？
妖精の王オベロンの一族に祝福された
施しものをする人。

とどまれ、真実よ、長い遅延のなかでとどまれ、
なぜこれらの小さな子供たちはあなたを見つけなければならないのか？
子供たちには永遠に寓話を弄ばせよ、
靴下を永遠に吊るせ！

パトルーンたちの時代のハドソン川上流のオランダ風クリスマス（A Dutch Christmas up the Hudson in the Time of Patroons）

赤い暖炉の上、ほら、緑の枝！
鎌の家そして鋤の家庭のなか、
私はあずまやをしつらえて座り、今やリンゴを焼く！

ほら、向こうの納屋では殻竿を終えた。
小麦のことは心配するな、強風のなかで風選するな、
クリスマスの祝日だ、七面鳥やビールも！

赤く古いオークの板壁を這う、
ヒカゲノカズラ、ほら――芳しいバルサムの小屋の臭いをかげ！

カトリーナ、そこでぐずぐずしてじろじろ見るのはやめろ、
鍋のなかでクリームが出来上がるには時間がかかる。
その時ドアをノックする音がした。ヴァンだ。
トゥエニス・ヴァン・デル・ブルーマヘル、お前のクリスマスの男友だちだ。

鳥たちがキスをした木立には今や葉はない、
私はよく知っているが、今晩バイオリン弾きが額を拭い、
ダンスに喘ぎハンスといとこのクリスが
やってくる時、
窓の向こうのヤブは悪くはない！

だがお前たちは厩の馬のためにオート麦を積み上げたか？
そして若い雌牛と老いた母牛のために
干草を二番草の山から掻き集めたか？
クリスマスがだれもかれもすべての生き物に来ますように！

もっとも行商人が覗き見、疑いもなく、それを愚かだと思った、
軛に繋がれた家畜の角に私は緑のモチノキを絡ませた。
この祝福されたクリスマスの朝、彼らの芳しい息を吸うことはよい、
牛、ロバ、そして生まれたばかりの赤ん坊のことを心に留めて。

雪が漂い漂う、そして霜が麻痺させる。
エルシー、いい子だから雪ホオジロにパンくずをやってくれ。

橇の鈴が鳴る！サンタクロースだ。万歳！
雪の泡立つ海を通って村の方へサンタクロースは行く、
そう、彼の多くの使い走りを終わらせようと急いで、

ミンスパイを監獄の中のある人に持って行く ——
何だって、ここの門柱のあいだを通ってだって？
そう、そう、小さな鋭敏な目、曇った窓ガラスを私たちはきれいにしなければならない！

私たちのサンタクロースは賢明で無料のやり方をする、
私からは決して受け取らないが、サンタクロースからは贈り物をもらう人がいる。
なぜならこのあたりでは、誰も貧しくないから ——
誰もそんなに貧しくないので
施しものとしてのプリンはドアのところで拒絶する。

世界中皆同様に ——
多くのクリスマスの日に幸せな良心の報いがありますように。

第２部　これやあれ、その他さまざまなもの（This, That, and the Other）

時の密告（Time’s Betrayal）

シロップを求めて熟したカエデを叩くことは、無謀になされたとしても、カエデの木を殺すことには必ずしもならない。そんなことはない。もともと自然の子供なので、それは多くの荒い取り扱いには耐えられるような構造に疑いもなく恵まれている。しかし未成熟な幹を傷つけ樹液を出すことは、木の十分な成長にはほとんど助けにはならないし、長老らしい長い生命を保証することもない。もっとも蜜作りは自分の専門ではない現行犯で見つけられると、森の子供には良いと主張するけれども。もちろん、いくつかの若いカエデにおいては、毎年叩くと秋の成熟や紅葉を早める。そしてそのような早すぎる変化は色の輝きを見事に増すように思われる。

道徳を改める必要がある誰かが、
略奪するミツバチのようにさっそうと出て行く。
誰かの糖分の多い木のなかで
彼はシロップが上がるのを待ち伏せる。
それほど良心に欠け、
それほど向こう見ずに生命を傷つける、
春の望ましい甘味、
彼の重要商品である樹液を得るために、

彼は格好のよい若いカエデを傷めつける。
私の再生林の低林のなかの王だ。
暗殺者だ！　見たこともない犯罪のなかで安全で
下生えは密集し、彼の犠牲者でさえも衝立だ。

そうだ。だが、悪事は露見する、
疑いもなく、疑いもなく。
よい季節には葉が語る、
霜の前に紅く染まり、
だが、紅葉の時期には、すべての美にまさる
しばしの間、しばしの間！

悪ガキには少しの感謝。だが、視覚には、私にとって
穏やかな女神が栄光の木を指さす、
「早く死ぬ者は変化する、生命を与えるのは詩人
キーツは詩神ミューズに刺され、彼の花輪は見事！」

深遠と軽率（Profundity and Levity）

フクロウが、いつもの長い隠遁を、マキバドリが牧草地や森の上高く朝の太陽のなかで跳ね回り楽しく歌うのにかき乱され、そのはしゃぐ鳥にあれこれと言う。そうすることで、悩まされていた時、彼を夢中にさせていた瞑想を口外する。しかし知恵の重苦しさは幾分トリルのような表現とは適合しない。咎められた図々しい鳥の圧倒するような歌の伝染性の影響に疑いもなく起因する不調和である。

それほど陽気で、それほど軽率で、
知恵を置き去りにし、
ヒバリよ、おまえは心の前進を
ほとんど考えない。

とりとめなくおまえは飛ぶ、
上方へカーブを描き歌う。
太陽のなかで跳ね回る小さな点、
ここ森のなかの庇の下で、
私は私の知恵を与える

この最近のテーマに、
人生は強い光にまたたく、
人生は夢のように夜さまよう。——
それでは人生は生きる価値があるのか？

碑文（Inscription）

アローヘッドの丘の新しい持ち主によって最後のハードハックが切り倒された場所近くにある一個の玉石に寄せて

一本の雑草がここに生えていた。役に立たず、
雑草は車輪を回転させたり、動かしたりしない、
いくつかは純粋な輝きや芳香を持っているが、
これは持っていなかった、
それでも天はそれが日向でなまけて
過ごすのを許した。

キューバの海賊（The Cuban Pirate）

西インド諸島のよりきらきらしたハチドリのなかにはその大きさはカブトムシかハチと同じぐらいのものもある。

宝石をちりばめた衣装をまとった海賊——
ルビー、琥珀、エメラルド、黒玉——
暗がりで、炎のように輝く点、
お前はまだ略奪するのか？

夏はお前の海、そしてそこでは
海上の花にお前は乗り略奪する、
お前自身はもっとまぶしく美しい——
小さく、羽があり、宝石に飾られた野蛮人だ！

ちび！だが、激情をたぎらせる
フリオーソだとクレオールは言う。
羽のあるお前は変装したキューピッドなのか
今や楽園の飛行する閃光なのか？

化身（The Avatar）

開花や接木あるいは種まきの評判に
花の神々は注意を払わない。
バラの神はかつて降りてきて
バラの形をとったか？ いや、本当は
野草か雑草、野バラの柔和な形と
控え目な姿をとった。

展示中のアメリカアロエ（The American Aloe on Exhibition）

すべての人が知っているように、この植物は１世紀に１度しか花が咲かないのは、植物の迷信にすぎない。いかなる場合においても、開花が普通の期間（長くて８年か10年）を超えて何十年も遅れる時、それは環境あるいは土壌に何か遅らせるものがあるからだ。

１世紀に１度しか花を咲かせない植物を
見にくる人は少ない。
10セントの入場料――
時のボンボン菓子に対して払う代価だ。

動物園の野生のものの
奇妙な不活性で空虚な無関心のなかで、
古老は観光客に凝視させる――
誰が見にこようと意に介せず。

だが夜には寂しくなり、花輪は溜め息をつき、
老いた茎は嘆いた。
「ついに！ついに！だが喜びと誇りといったものと
私はなんの関係があるのか？」

花が長い間咲かないのは
定めだ。
だが、ああ、滅び去った汝らバラは
私を雑草とみなした。

地表づるがクローバーの正当な認知を花々の女王にとりなす
（A Ground-Vine Intercedes with the Queen of Flowers for the Merited Recognition of Clover）

遠い昔よりずっと賛美され、
恋人、予言者、そして王のテーマ、
永遠に君臨する、バラ！ なぜならあなたは美しい、
天はあなた以上に美しいものを保有しない。
妖精の耳に釣鐘草が、女王よ、
あなたの美、あなたの名声を鐘を鳴らして知らせる。
あなたの称号を、エリエールの風に吹かれて
群がるラッパ形の花をつける草が賛美する。

地表を這うがさつ者の私もそう、
ここではかつては大胆だけど、本性は恥ずかしがり屋 ——
信奉者というなら、あなたの信奉者は至るところにいる。
そしてあなたに媚びへつらい、賞賛者は競う ——
あなたの心はもっと従順を共有すべきだ。

ああ、バラよ、私たち植物は皆親戚、
私たちの根は囲い込む。それぞれは
より広い場所や清々しい空気を
勝ち得ようと競う。
だが美しいもの、不器量なもの、陰、日向 ——
ここではだれも同じように共有することはない。

そして草にランク付けされ、花は存在する、
たとえ種においては高くなくとも、陽気で、
田園の姉妹たちと上手く繁茂し、
開花のときにはより広い天候を共有する、
たぶん、簡素な優美において魅力的 、
地位の低いエデンを彼女の顔に纏う。

私の女王よ、私はずっと地を這う、
地を這うことはできるが、あなたの目を勝ち得ることはできない。

だが、ああ、あなたの庭園の壁を凝視せよ、
そして、もしあなたが恥じるなら、それは
低い地位を魅力あるものにしている
いとこのクローバーと親戚関係を認めるからではない。

作品はハーマン・メルヴィル（Herman Melville, 1819–1891）の遺稿で1924年に出版されている。いくつかのテキストがあるが、ここでは以下のものを使用する。
Melville, Herman. *Weeds and Wildings Chiefly: With a Rose or Two, by Herman Melville: Reading Text and Genetic Text.* Ed. with introduction by Robert Ryan. Evanston: Northwestern UP, 1967.